

世界史

I 次の文章を読んで空欄に最も適切な語句を記入せよ。

現在の中華人民共和国の首都は北京であるが、中国全土からみて東北に偏したこの地が最初からいわゆる「中国」の中心であったわけではない。前近代中国の歴史は、10世紀を境に前期・後期に分けることができるが、前期は長江流域以南の南中国の開発がそれほど進展しておらず、北中国が王朝政治の中心であった。もっとも北中国自体も広大な領域であるので、これを東西の地区に分けることができる。すなわち 流域を中心とする「関中」（函谷関以西）と黄河中下流域を中心とする「関東」（函谷関以東）地域である。前期中国の興亡の歴史は、「関中」・「関東」各々に拠点をついた諸王朝の東西対立の様相を呈した。

実在が確認されている最古の王朝は殷であるが、関東拠点の王朝であり、末期は現在の河南省にあたる殷墟に都を置いていた。これに対抗する西周王朝は関中を拠点とし、東に進撃して殷を滅ぼした。西周は関東支配の拠点として 邑を建設し、武王が置いた関中の と共に、この二大拠点を東西に結ぶ軸線が王朝の中核地域となる。首都と副都からなる複都制の起源である。

西周が前8世紀の混乱で崩壊し、王朝が 邑に拠点を移すと、その後関中で台頭した勢力が秦国である。同国は戦国時代の間に強大化し、関東の6大諸王国と対峙する東西対立の形勢が再現した。結局、軍事力などで勝る秦国が中国を統一し、 に都を置くが、統一後わずか15年で滅亡した。前漢の高祖は現在の江蘇省の出身であるが、項羽によって漢中（現在の陝西省南部）に封建されたのを機に、北に進撃して関中を攻略して根拠地とし、やはり東進して中国を統一した。その都長安は の近郊であり、秦国の後継者として前漢帝国は東西対立の情勢を伏在させていた。それがあらわになったのが、呉楚七国の乱である。その後、王莽政権崩壊の過程で関中が荒廃すると、魏晋南北朝時代にいたるまで、ここには強力な統一政権ができなかった。

ようやく南北朝時代末期に、北魏王朝から派生した勢力が前漢長安城を都として、

西魏とそれに続く **E** 王朝を建国し、関東の東魏・北齊王朝と対峙した。当時の関中は関東に比べ経済・文化などで劣っていたが、府兵制という新しい軍制を組織して、北齊を打倒し、隋朝にいたって南朝を征服し統一帝国を樹立した。隋の煬帝は長安（大興城）に加えて、**B** 邑近辺に新都城を建設し、続く唐王朝もそれを継承したので、西周時代のような首都―副都の東西軸が復活したのである。そして、関中政権が関東を征服して支配する構造は、西周・秦・前漢王朝の東西対立構造の再現であったことはいうまでもない。

こうした北中国の東西対立に変化が現れるのは唐王朝崩壊以後である。それより前から、隋代に建設された、関東と江南を結ぶ流通ルートである **F** が機能し始めた。さらに王朝政府は、安史の乱以後荒廃した北中国に代わり南中国の富に注目し、中国経済の重心は長江下流域、つまり帝国の東南方面に移動し始める。それと同時に、北方遊牧民地域では、モンゴル高原のウイグル帝国が崩壊したのを受けて、中国東北部の契丹族が強大化し、中国王朝の脅威も東部に移動し始めたのである。そして、それに対抗すべき中国軍は **G** 制の傭兵部隊に変質しつつあった。つまり東北の強敵に対抗すべく精鋭部隊の禁軍を東方に集中させ、同時に南方の経済中心地から彼らの給料を調達するには、王朝の拠点に関東に移す必要があったのである。こうして唐末から北宋にかけて登場した新首都が **H** である。一方、中国の宋朝を圧迫した金朝は、遼の **I** 京を接収すると、中都と改名し首都とした。これが現在の北京の始まりである。

こうした南北に分裂した中国を統一し、さらには北方遊牧民地域まで包摂したのが元朝である。寒冷な地を好むモンゴル族の支配者は、本拠地を置くにあたって、遊牧地域と農耕地域の両方を支配するのに好都合な地として北京を選んだ。同時に北方の支配階級・軍隊を養うために、**F** 及び海運を利用した。こうして帝国の比重は東方沿海地域に決定的に移行し、北京を都とする後期中華帝国の基本構造が定まったのである。これ以後、関中に都を置く統一王朝は2度と出現しなかった。

一時江南の応天府に都を置いた明朝では、北京遷都後も応天府が副都扱いされ、**J**（金陵）と呼ばれるようになった。軍事の北京と、経済の **J** を結ぶ線が王朝の中軸となり、軸線の向きは前期中華帝国の東西から後期の南北へと転換したのである。

元朝と同じ北方民族出身の清朝もやはり北京を都とし、漢族王朝である明朝を凌駕して中国東北地区・モンゴルなどの周辺地域を包摂する大帝国を建設した。これが現在の中華人民共和国の支配領域の原型となる。こうした視点に立てば、現在の中国を形づくったのは、元と清という2つの征服王朝であるといえよう。

(このページは空白)

Ⅱ 次の文章を読んで空欄に最も適切な語句を記入し、下線部についてあとの問いに答えよ。

高麗の始祖・王建は、877年に朝鮮中部の松岳郡（後の A ）の豪族の子として生まれた。王建は中国との交易によって実力をやしない、918年に自らが仕えた王・弓裔^{きゅうえい}を倒して王になり高麗を建国し、翌年に A を都に定めた。さらにその後20年足らずのうちに、高麗は、新羅・後百済といった周辺国を統一した。

このような高麗の草創期は、中国ではいくつもの王朝や国が興亡した B 時代にあたる。その少し前には、契丹に C があらわれて諸部族を統合して、916年に大契丹国の皇帝となった。契丹は926年には長いあいだ仇敵だった D を滅ぼすが、この前後には数万人の D 人が高麗に亡命した。高麗は契丹と国交をむすんでいたが、 D 滅亡後には契丹に対する警戒心をつよめて、契丹と国交断絶する。^[1]

建国後、中国の文物・制度を熱心に取り入れた高麗は、10世紀までは主として宋の制度をモデルにして政治体制を整えていった。中央集権機構を組織し、その運営に必要な官僚として地方豪族を積極的に登用しつつ、安定した統治体制を形成した。高麗の官僚は文臣と武臣からなるが、これを総称して E という。

ところで、この E 体制が完成するのは15世紀以降の朝鮮王朝時代である。その基盤となったのは、文臣の登用手段として高麗でも958年から実施されていた F 制度であった。 F が最も盛んに行われた朝鮮王朝時代には、文官試験である文科、武官試験である武科、技術官試験である雑科の3つが行われた。中でも重視された文科では、中国の古典に関する試験が行われた。^[2]

11世紀に入り契丹との戦争が終わると、高麗は全盛期を迎える。特に貿易が盛んになり、宋や日本、アラビアなどの商船も出入りするようになった。輸入品の多くは宋で作られた品々だったが、特に宋の磁器と書物の輸入は、高麗の磁器生産と木版印刷術の発達に大きな影響を与えた。^[3]

12世紀後半になると、文臣優位の体制に反感を持っていた武臣が軍人と一緒になって多くの文臣を殺すという事件（「庚寅^{こういん}の乱」）が1170年に起こり、その首謀者である鄭仲夫らが政権を掌握した。高麗ではこれ以降100年間、武臣政権が続くこ

とになるが、モンゴル帝国から帰国して高麗の王位を継いだ元宗が、モンゴル帝国との連合軍により高麗内の武臣勢力を一掃し、武臣政権は終わりを告げる。しかし、武臣勢力の一掃にモンゴル帝国を利用した高麗は、その後しばらくはその支配下に入るようになった。

14世紀以降、高麗は南北の双方から外敵の侵略を受けた。北方からは、漢族の反乱軍である紅巾軍が2度にわたって侵入してきた。また南からは、略奪・私貿易の集団である G の侵略が本格化した。高麗末期にその討伐で活躍した李成桂が最後の高麗国王に即位し、やがて朝鮮王朝を開くことになる。

〔1〕 この後、10世紀から11世紀にかけて、契丹が3回にわたり高麗に攻めてきたが、高麗の国王や群臣たちは、こうした国難を克服するために仏教経典の集大成となるものを刊行した。それは何か。

〔2〕 朱熹が最も重視した儒学の古典を総称して、何というか。

〔3〕 後に高麗独特の技術とデザインで作られるようになる磁器を何というか。漢字4文字で答えよ。

Ⅲ 次の文章を読んで空欄に最も適切な語句を記入し、下線部についてあとの問いに答えよ。

西暦7世紀前半、クライシュ族の **A** 家に属する預言者ムハンマドによって、アラビア半島西部においてイスラームが開かれた。ムハンマドの死後、4人の正統カリフを指導者として、アラビア半島外にイスラームが拡大した。東方でササン朝ペルシアを滅亡させると、現在のイランとその周辺を支配下に組み入れた。661年に成立した、**B** に都を置くウマイヤ朝は、西方のフランク王国への侵入を試みた。続くアッバース朝期には、中央アジアにおいてアッバース朝軍が唐軍に勝利した。結果として、8世紀頃までには、西はイベリア半島から東は中央アジアに至る広大な地域にイスラームが広がった。その後イスラームは、インド亜大陸やインド洋周縁部へ浸透していく。

インド北部のイスラーム化について言えば、インダス川下流域の **C** 地方に至る一帯をウマイヤ朝が支配下に入れたことが契機となる。10世紀以降、現在のアフガニスタンに興ったガズナ朝や **D** 朝がインド北部への侵入を繰り返した。13世紀に **E** によって奴隷王朝が開かれると、以降320年間にわたって、**F** を首都とする5つのイスラーム王朝が繁栄した。14世紀には、モロッコ生まれの旅行家イブン=バットゥータが、インド北部に1320年に成立した **G** 朝下で、イスラームの法官として8年間にわたって働いていた。

インド洋に目を転ずれば、季節風を利用した海上交易ルートである「**H**」が、重要な役割を担った。9世紀半ばから10世紀半ばにかけての同時期、西にアッバース朝、東に唐という二大帝国が繁栄し、ムスリム（イスラーム教徒）商人の往来が活発になった。特に、ユーフラテス川下流域に638年頃に建設された軍営都市である **I** や、イランのシーラーフ、オマーンのスハールを拠点としたアラブ系やイラン系の商人が、三角帆を持つ木造船 **J** を用いて活躍した。彼らのうちインド西海岸に至った人々のなかには、婚姻などによって現地社会に溶け込む者もあり、同地のイスラーム化が進んだ。

東アフリカ沿岸部では、10世紀から13世紀頃にムスリム商人や移住者が到来すると、イスラームが受容され、様々な都市が発展した。そのなかには、現ケニア最大

の港として知られる K や、現タンザニアのザンジバルがある。15世紀にポルトガル勢力が到来すると、これらの都市の多くが略奪と破壊の対象になった。この一帯では、バントゥー系の言語体系を基盤としつつもアラビア語をはじめとした外来語を取り入れた、L と称される言語が発達した。

さらに東南アジアへは、遅くとも8世紀には、ムスリム商人が香辛料を求めて来航^[2]していた。彼らは中国南部の広州や泉州にまで至り、外国人居留地であるMにて交易に従事した。もっとも、東南アジアにおける本格的なイスラーム化の動きは、13世紀以降のことである。

[1] イスラーム法においては、クルアーンと預言者ムハンマドの言行であるスンナが主たる典拠となる。スンナをまとめたものを何というか。

[2] 10世紀後半にマラッカ海峡周辺に成立した小国家群は、宋に対して朝貢していた。中国側史料ではそれらの小国家群を何と総称したか。

IV 次の文章を読んで空欄に最も適切な語句を記入し、下線部についてあとの問いに答えよ。

19世紀中葉以降圧倒的な経済力・海軍力の優越を誇っていたイギリスは、第二次世界大戦の後にはその地位をアメリカに譲り、もはや覇権国家としての栄光は過去のものとなってしまった。しかしさらに歴史をさかのぼると、イギリスは一朝一夕に大国となったわけではないことがわかる。大ブリテン島には、9世紀までにアングロ=サクソン人によってアングロ=サクソン七王国（ヘプターキー）が建国されていたが、1066年に北フランスから侵攻してきた勢力によって征服され、強力な王権を持つ **A** 朝が成立した。その後、フランス西部を拠点とする大貴族が1154年に血統の関係から国王となって始まった **B** 朝の期間には、王権と貴族との争いやフランスとの戦争などが続いた。フランスとの戦争が終了した後は、1455年から1485年まで、**C** 家とヨーク家が王位を争う内乱が生じた。この内乱の試練を乗り越えた次の王朝がイギリス発展の礎を築くこととなった。この王朝の時代にイギリスは主権国家としての地位を固め、海外への進出・国力の充実が図られたが、その象徴といえるのが、同王朝最後の国王在位中の1588年に強力なスペイン海軍を撃退した^{〔1〕}ことであろう。

1603年にこの王朝が断絶すると、スコットランド国王がイングランド国王として即位し、新しい王朝が始まる。この王朝の時代には、内乱、共和政、王政復古というように政治的混乱が続いたが、名誉革命によって王権を制限し議会在位立つ政治体制が成立することで、イギリスは政治的安定を確保した。18世紀になると、ドイツから新国王 **D** が迎えられて新しく **E** 朝が始まるが、1721年から実質的な首相となった **F** の下で議会政治は成熟していった^{〔2〕}。またイングランド銀行の創設やその後の国債制度の整備によって財政的にも安定し、イギリスは財政軍事国家として対外戦争能力を高めて、ヨーロッパ内外の戦争を優位に進めることができるようになった。

イギリスは、植民地獲得競争でフランスなど他のヨーロッパ諸国に勝利し、周縁諸地域に位置する公式・非公式の植民地からの膨大な富を集め、産業革命^{〔3〕}をいち早く経験するなど、19世紀にはヨーロッパで圧倒的な優位を確立した。こうしてイギ

リスは世界帝国を形成していくわけであるが、国内政治に目を向けると、地主エリート層を中心とする二大政党制が維持されていたものの、改革を求める動きも開始されていた。^[4] イギリス国内の農業利益を保護させる目的で1815年制定された **G** が1846年に廃止され、自由貿易政策へ舵を切ったのもその一例である。^[5] 19世紀中葉はイギリスの繁栄の絶頂期と言え、特に1851年にロンドンで開催された最初の **H** は、イギリスの技術力を結集した「水晶宮」が主会場となり、参加者を驚かせた。

しかし1870年代ごろから重化学工業を中心とした第2次産業革命が始まる中で、しだいに他の国々も経済力が向上し、イギリスの圧倒的優位は崩れていく。折りしも帝国主義時代に入り、欧米諸国相互の対立も深刻さを増すなかで、やがて20世紀の世界大戦を迎えることとなる。2度の世界大戦でイギリスはいずれも勝者の側になったとはいえ、経済的・政治的に大きな打撃を受けた。第二次世界大戦後はアメリカの援助もあって経済は再建され、イギリスは福祉国家の道を歩み始めたが、^[6] 長期的にはイギリスの衰退は避けられなかった。^[7] そうした中で、第二次世界大戦後、イギリスはフランスと西ドイツ（当時）を中心に進められたヨーロッパ統合の動きに対して微妙な立場をとった。しかし、統合の流れに乗って、1973年にヨーロッパ共同体（後のヨーロッパ連合）に加盟した。

- [1] スペイン海軍を撃退した海戦で副提督を務めた人物は、私掠船でスペイン植民地の略奪を目的にアメリカへ進出し、結果的にイギリス人として初めて世界一周を成し遂げた。この人物の名前を答えよ。
- [2] 議会政治を支えた2つの政党のうち、後に保守党と呼称されるようになった政党名を答えよ。
- [3] 1814年に炭坑用の蒸気機関車を製作、1825年には客車の牽引に成功し、輸送革命に貢献したイギリスの鉄道技術者の名前を答えよ。
- [4] 1830年代後半から始まり、中産層や都市労働者層を中心としてより民主的な選挙制度を求めた運動の名称を答えよ。
- [5] この時期のイギリス国王の名前を答えよ。

〔6〕 共産主義勢力拡大の阻止のため、アメリカの援助によるヨーロッパ経済の復興をめざした計画のことを、当時のアメリカの国務長官の名前にちなんで何と
いうか。

〔7〕 1979年イギリス初の女性首相となり、衰退を克服するためとして従来の福祉
国家路線を修正し、経済の自由化や産業民営化といった新自由主義政策を打ち
出した人物の名前を答えよ。

(このページは空白)